第3回多摩川流域歴史セミナー

『多摩川上中流域の先史・古代』

講演 ： 和田哲 氏

－開催報告－

『多摩川50景』 日野橋と立川公園

平成27年6月21日（日）
多摩川流域懇談会

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

講演『多摩川上中流域の先史・古代』

講演 ： 和田 哲 氏

■なぜ多摩川上中流域から化石が発見されるのか？

多摩川上中流域、昭島から立川にかけて、そして浅川流域では化石が多く見つかっています。

昭和 36 年、多摩川の八高線鉄橋下からクジラの化石が見つかりました。全長 16m で、ほぼ全身の骨格が残っています。アキシマクジラと呼ばれていますが、正式な学名ではありません。現在、群馬県立自然史博物館で研究を行っています。クジラと一緒にサメの歯も見つかっており、多摩川のこの地域は海であったことが分かります。

アキシマクジラが見つかった地域より 1km 上流、多摩川の昭島市拝島町水道橋下では、平成 12～14 年にかけて、アケボノゾウの幼体（子ども）頭骨、足跡、イヌ属の頭骨、カズサジカ等の化石が発見されました。足跡は生痕化石といって石膏で型どりしました。他には中央線の日野鉄橋付近でアケボノゾウの切歯が、浅川の八王子付近でハチオウジゾウの化石が発見されました。昭島の啓明学園南の多摩川では、アケボノゾウの臼歯が見つかっていますが、個人の方の持ち物で、現在は所在不明となっています。

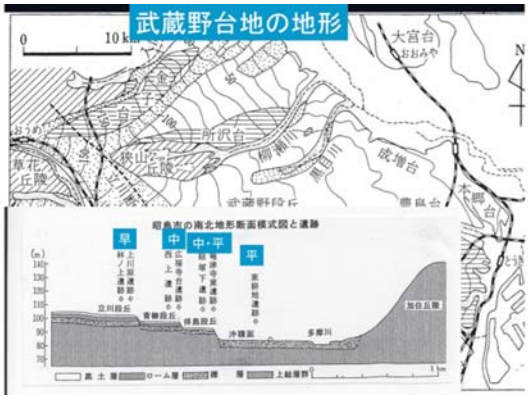
アケボノゾウは、ゾウの系統図で見ると、小型の象であることが分かります。

これらは何故この周辺で見つかっているのでしょうか。関東山地と関東平野の地形はどのように成り立ったのか見てみましょう。今から約 350 万年前頃から関東山地が隆起し平野が沈んでいきました。約 200 数十万年前には隆起と沈降がさらに明らかとなり、平野に河川で運ばれた土砂が堆積していった部分は加住礫層（かすみれきそう）と呼ばれます。約 160～170 万年前には平野がさらに沈降していきました。その隆起と沈降の境目にあたる部分が化石が発見されている昭島の辺りです。そのため、海だった部分にはクジラがいて、陸の部分にはゾウがいた環境だということになります。多摩川沿いの昭島周辺の地域の基盤層は上総層群（かずさそうぐん）と呼ばれ 250～50 万年前に海の中に堆積した層（海成層（かいせいそう））です。渋谷で温泉施設がガス爆発を起こしたことがありましたが、上総層群の中のガス層（南関東ガス田）が原因で爆発したものです。今でも千葉の辺りではこのガス層を家庭で利用している地域があるそうです。

上総層群は斜めに堆積しているのですが、ちょうど昭島周辺で昔の地層が出ています。それより上流では上の層は削られています。昭島周辺は 100 数十万年前と現在の交差点と言えます。山地と海が分かれてきたところ、約 170～180 万年前に堆積した加住礫層の少し上の層からアケボノゾウが、さらにその上の約 160～170 万年前の層（小宮砂層）からクジラが発見されました。これからもそのような化石が出てくる可能性があります。以上が日本列島に人間がいなかった時代についての話です。

■多摩川上中流域の地形

武蔵野台地は青梅を中心として扇状地が広がっており、国分寺崖線があり、武蔵野段丘、多摩川へと続いています。今話をしている多摩川上中流域の地層は若干異なります。昭島市の地形の断面図を見ると、高いところから立川段丘、青柳段丘、拝島段丘と段丘が重なっており、沖積面を経て多摩川に向かう地形となっています。拝島段丘は新しく、縄文早期の古い遺跡は有りません。崖地形になっているところは、湧水があり、そういうところに人が住むようになってきました。



地形の断面と遺跡の位置について関係を見ると、最も上の立川段丘には縄文早期、青柳段丘から拝島段丘にかけては縄文中期、拝島段丘から沖積面には平安時代、というように、徐々に下へ下へ多摩川の方へ追う様な形で人々が住むようになったことが分かります。旧石器時代（約 3.5～1.5 万年前）については、多摩川上中流域には野川流域や多摩丘陵と比べ大規模な調査も行われておらず良好な旧石器遺跡も発見されていないため、縄文時代の話に移ります。

■縄文土器は世界最古、木の文化？

縄文時代は長い歴史があり、縄文土器は世界最古と言われる土器です。青森県の大平山元遺跡から約 1.6 万年前の土器が出土しています。従来、土器は新石器時代にできたと言われており、メソポタミア等が注目されていましたが、7,000～8,000 年前程度で古い土器はありません。

縄文時代は石器時代ですが、「木の文化」とも言われています。これまで縄文時代は、野蛮な時代と言われていましたが、最近では自然と調和した豊かな生活を送っていたとされ、イメージが変わってきました。いくつかの要因がありますが、その一つは大規模調査です。高度経済成長期に多摩ニュータウンなどで大規模調査が進み、遺跡全てが調査されるようになり、生活が分かるようになってきました。

多摩川の流域では土器と石器、竪穴住居ばかりが確認されていますが、低地の遺跡では水があることで酸素が供給されないため、植物質遺物がたくさん出てきます。福井県の鳥浜遺跡（貝塚）では、初めて縄文前期の植物の遺物が確認されました。葉っぱが出てきたときには緑色をしていて、取り出した瞬間に色が変わった、時には紅葉した葉っぱも出てきたという逸話があります。このように低地の遺跡から木製品が出てきたことで、生活が分かるようになりました。また、人骨などの DNA 分析、C14 年代測定（放射性炭素年代測定）などの科学的調査も進展しています。

人類学的にも様々なことが分かるようになりました。例えば、アフリカやオーストラリア原住民の調査では、1 日に必要な食材は朝のうち、それも約 2 時間以内で確保できたことが分かってきました。残りの時間は昼寝か噂話をしていたことが様々な研究結果が合わさって分かってきました。従来のイメージを一新するものでした。

縄文時代は定住の生活が特徴で、土器の使用によって、食生活が多様化してきました。狩猟・漁撈（ぎょろう）、採集の生活に加えてお米（陸稲）も作られていたことも分かってきました。

縄文時代は 6 つに分けられます。草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の 6 期です。時間幅はまちまちで、草創期、早期がそれぞれ約 4,000 年、残りの 4 つの区分は合せて 4,000 年（それぞれ 1,000 年前後）です。

【草創期】

草創期は氷河時代から急激に温暖化し寒暖の激しい時期でした。早期から前期にかけては、温暖化が

進み、前期には海進現象（海水面の上昇）が起きました。

旧石器時代から草創期にかけては寒かったため、標高が高いところには氷河ができて海面が低下していました。一番低下していた時は東京湾で現在の水位より約 140m ほど低かったそうです。前期には温暖化により海水面が上昇し、栃木県の南の方、藤岡貝塚のあたりまで海進しました。多摩川は流れが急だったため、河口から立川付近あたりまでは約 90～100m の高低差があり、海進は河口部のみでした。中期はほぼ今と同様の気候環境でした。

草創期の多摩川上中流域の遺跡として、あきる野市の前田耕地遺跡、日野市の七つ塚遺跡の 2 つの重要な遺跡があります。

前田耕地遺跡は、多摩川と秋川の合流点に位置し、2 つの住居跡（16 号住居跡、17 号住居跡）が見つかり、17 号住居跡からは石槍 188 点（チャートが中心）の他、サケの歯が約 7,000 点発見されました。サケについては体長約 1m のサケ、70～80 頭分だと推定されます。このように草創期の多摩川にはサケが盛んに遡上し、それを捕って生活していたことが具体的に明らかになりました。

七つ塚遺跡は草創期後半の遺跡です。多縄文土器や石器（特に矢尻）が多数確認されました。南関東ではこの時代の遺跡は少なく、ほとんど見つかっていません。

【早期】

早期（約 1 万年前）の遺跡としては、立川市の大和田遺跡、昭島市の林ノ上遺跡、上川原遺跡、府中市の武蔵台遺跡があります。この頃、土器は撚糸文系（撚り紐を押し付けて施文）から条痕文系（木の板や二枚貝の背などを用いて器面を整える際に施文）へ展開していきます。大和田遺跡では住居跡が見つかっており、上川原遺跡で見つかった土器はこの時代の土器としてよく残っているため、佐倉市の国立歴史民俗博物館でレプリカが展示される予定です。林ノ上遺跡は見つかった土器にかつて「拝島式土器」という名前が付けられたことで有名な遺跡です。

早期の終わりごろには、住居はあまり出て来ませんが、炉穴が多く見つかっています。一部に焼けた跡が残っており、煙出し（煙突）のような部分があります。調理施設と考えられていますが、詳細はよく分かっていません。

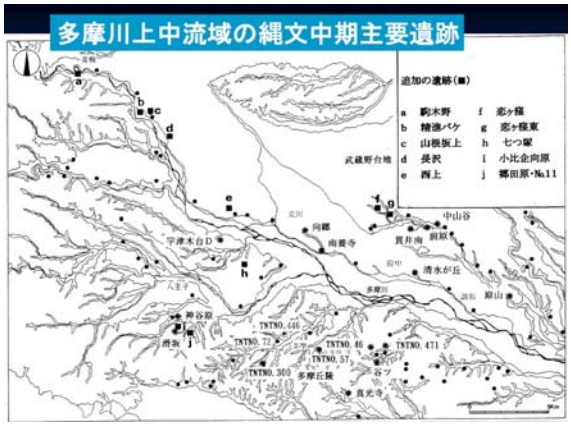
八王子市のみなみ野遺跡などで多くの落とし穴も発見されています。中央に棒を立てる穴があり、獲物が落ちた際にジャンプさせないようにしたり、お腹に棒がささったりすることを狙いとしています。また、穴の形も底に向けて狭まっていく形になっており、鹿などが足をかけるところが無くなって逃げられなくなるようなものもあります。丘陵上に多くの落とし穴が見つかっています。

落とし穴は狩猟法としては広く世界各地に存在すると思います。ただ、日本では静岡県の旧石器時代の落とし穴が発見されていて世界的にも珍しいと思われます。

【中期】

中期は縄文時代で最も発展した時代です。多摩川の本流沿いと浅川上流で多くの遺跡が発見されてい

ます。武蔵野台地にはあまり多摩川に注ぐ大きな川がありません。この辺りに残堀川はありますが、支川は非常に少なかったのです。一方で浅川にはたくさんの支川があったため、そこに集落が発展し、遺跡が確認されました。



青梅市の駒木野（こまぎの）遺跡ではかんぽの宿建設時の調査で住居跡と多くの土器が見つかりました。羽村市の山根坂上遺跡では、半円形の環状列石が発見されました。環状集落の中央にあった祭祀遺構だと考えられます。このように環状集落などの大規模集落遺跡が発展していきました。

立川市の向郷（むかいごう）遺跡は府中崖線沿いで、典型的な環状集落が確認されました。崖線の下には現在矢川湿地が広がっており、昔も広い湿地であったと考えられます。向郷遺跡はその上に位置しています。日本でも典型的な環状集落です。住居は径 120m の範囲内に集中していますが、中期の終わりに集落が崩れて分散するようになりました。岩手県の西田遺跡の環状集落も代表的です。中央にお墓、周りにピット群、その外側に住居が立て替えられながら分布し、同心円状に集落がつくられることが特色です。

向郷遺跡では約 300 基の環状墓群が確認されています。中には甕（かめ）被り葬といって、頭に甕をかぶせた埋葬形式が見られました。穴の端に甕があり、人骨は残っていませんが、他の遺跡で残っているところでは頭に置いていることを確認できます。ピット群は儀式をやるときに使っていた掘立の建物の跡だと考えられていますが、倉庫の跡だという人もいます。竪穴住居が同じところに建て替えられていることも分かります。広い土地の他のところに建てても良いように思いますが、一定の範囲内に建て替えていることが特徴です。約 300 軒の竪穴住居がつくられたと考えられます。何世代かに渡って作られていますが、同じ時期に多くの住居がありました。結果的に環状集落になったとの意見もありますが、計画性がなければこのような同心円状の集落はできないと考えられます。遺跡からは土器以外に琥珀の飾りや土偶等が確認されています。

集落形成にとって水は最も重要な条件です。環状集落はほとんどが直径 100mを超えますので、広い平坦面が確保できることも重要だと考えます。

多摩川流域の遺跡の特徴を最も良く表しているのは「石器」だと思います。千葉県松戸市の紙敷遺跡と多摩川流域の多摩ニュータウン 441 遺跡の同規模の調査で確認された石器を比較すると、多摩川流域の遺跡では、千葉県の遺跡と比べて、打製石斧が多く見つかっており、磨石、石皿、石匙も多いことが分かります。これは、多摩川流域が石材に恵まれていることに加えて、何で生活しているか、生業の違いによるものと考えられます。紙敷遺跡からは土器片錘（魚をとる時の重り）が多く出土していることから、漁も重視して暮らしていたことが分かります。

縄文文化は木の文化と言われます。福井県の鳥浜貝塚（縄文前期）からは、石斧の柄、編み物や葉っぱ、朱塗りの木の櫛等が確認されています。東村山市の下宅部遺跡からは、朱を塗った飾り弓や魚とりの筌が出てきています。当時の人たちはこういったものを使って魚をとっていたと考えられます。多摩

川流域から出てくるものは少ないのですが、広くみることで、この時代のことが分かります。

中期終わりごろには急激に寒冷化したと言われています。近年、北大西洋の海底の土の分析によって、完新世に 8 回の急激な寒冷化と回復があったとする説（ボンドイベント）が唱えられています。約 1,500 年間隔でそれらは起こっており、縄文中期終わりごろからの寒冷化は、今からちょうど 4,300 年前の寒冷化に相当します。ボンドとはこの研究論文の筆頭著者の名前です。中には縄文の時期区分の境目など、全てをこの「ボンドイベント」で説明しようと考える人がいますが、惑わされないように考えることも必要です。

【後期】

国立市の緑川東遺跡からは敷石遺構と 4 本の石棒（長さ 1m 以上）が出土しました。石棒のほとんどは壊れた状態で出てきますが、緑川東遺跡の住居の中からは初めて完全な状態で発見されました。これは注目すべきことです。

また、土着の土器（加曽利 EV 式）と関西系の土器（北白川 C 式、中津式土器）が一緒に発見されています。解釈はいろいろありますが、土器の土質を調べてみると、関西で作られたものではなく、フォッサマグナの東側の土でできたと分かりました。つまりは、土器が持ち込まれたのではなく、関西系の土器の技術を持つ人がこちらにやってきたのだと考えられます。敷石住居が出来た頃は社会の変動、人間の移動が激しい時代だったと分かります。

あきる野市の中高瀬遺跡の敷石住居跡（縄文後期）では、土偶がたくさん見つかっています。青梅市の寺改戸遺跡（縄文後期中葉）では墓壙（ぼこう）群が見つかり、土瓶が完全な形で出土しています。

【晩期】

晩期に関しては、遺跡の数が激減します。浅川と多摩川の合流点にある日野市の南広間地遺跡では住居跡と土偶、土器の顔面装飾が発見されました。また、東北地方を中心として青森県の亀ヶ岡遺跡から出た特徴的な土器等、亀ヶ岡文化が全国的に開花しました。朱塗りの土器や籃胎漆器（らんたいしっき）（かごを編み込んで漆を塗ったもの）、遮光器土偶、石剣（石棒が小型で薄手に変化したもの）、装飾の施された耳飾り（調布市の下布田遺跡出土）などが出土しています。

■弥生時代　稲作、金属器の使用

弥生時代の特徴は水田稲作と金属器使用が始まったことです。弥生時代はいつから始まったのでしょうか？古い考え方では、紀元前 300～後 300 年の約 600 年間が弥生時代だと言われていましたが、その“弥生時代”以前の水田が見つかったので、弥生時代早期を組み入れたらどうかという意見もあり、従来より 500 年前（紀元前 800～900 年）から始まったと言われるようになりました。いま動植物等の年代測定は、C14 年代測定（放射性炭素年代測定）により行われるのが一般的ですが、それに倣うと日本の稲作は紀元前 10 世紀後半頃から始まっています。

稲作はどこから伝わってきたのでしょうか。昔はインドから伝わってきたと言われていましたが、最近では長江中～下流が稲作発祥だと分かりました。日本への伝播についての考え方は3つにわかれます。①直接入ってきた、②朝鮮半島を経由して入ってきた、③南の島を伝って入ってきた、という 3 つです。従来は②が有力でしたが、年代が合わなくなってきて日本の稲作の方が朝鮮半島より古いということが分かってきました。朝鮮半島に古い灌漑設備を持った水田が無いのです。それから、稲の遺伝子の研究

では、AからHの８つの遺伝子のうち、中国には８つ全て確認されており、朝鮮半島ではB以外が確認されています。一方で、日本ではBが多く確認されていますがその他の遺伝子はほとんどありません。そのため②は可能性が低いと分かってきています。今後の展開に注目する必要があります。

人間については、日本人は半島から来た人の混血が多いと考えられてきましたが、先日のテレビ番組で、日本人は縄文人の遺伝子を強く引き継いでいることが分かってきたという研究が紹介されていました。

金属器は中国大陸発祥ですので、大陸と交流があったという点は変わりありません。中国の歴史書にも、日本のことが記されていますが、『漢書』には、紀元前１世紀、日本の国が百余国に分かれていたと書かれています。紀元 57 年、後漢の光武帝の元に奴国が使いをやり、「漢委奴国王」の金印が与えられたと記録されています。金印のレプリカを持ってきましたので、ぜひご覧ください。

239 年には邪馬台国の女王卑弥呼が魏に使いをやったと『魏志倭人伝』に記されています。この時代の資料は魏志倭人伝しかなく、反論する資料等も無いので、忠実に解釈してよいか、どこまで正確か、ということは難しい問題です。卑弥呼とは日の御子、天照大御神から来ており、使人の話をもとに書かれたもので問題もあります。239 年、卑弥呼が使いをやった年の年号が刻まれた三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）が見つかっています。卑弥呼が魏に使いをやったときに 100 枚もらったと書かれていますが、国内から出ている三角縁神獣鏡は 500 枚近く、数が合わないと言う人もいますが、全てが記録されている訳ではなく、否定はできません。また、中国からこの鏡は１枚も出ていないことも問題です。最近、西安の骨董市で購入した三角縁神獣鏡を持っている学者がいることが分かりましたが、どこから出たか不明なため、実際のところはよく分かりません。

佐賀県の吉野ヶ里遺跡の甕棺墓からは首が無い遺体が確認されています。これは戦争があったと考えられます。葬制は地域により異なり、多摩川上中流域では再葬墓（土器に腐らせて骨にしたものを入れて埋めること）が確認されています。青銅器も多く見つかっています。八王子市の宇津木向原遺跡では 5.9cm の銅鏡が確認されました。中国から輸入した銅鏡は 20～30cm の大きさが普通のはずですが、それよりはだいぶ小さいものです。八王子市の中郷遺跡では 3.3cm の小銅鐸が発見されました。銅鐸は 50～60cm、大きいものは 1m 以上が一般的ですが、こちらも非常に小さいものでした。

横浜市の大塚遺跡では環濠集落が発見されました。敵に攻められないように、集落の周りが堀で囲まれていて、一時期に 30 軒、合計で 90 軒くらいがあったと考えられています。八王子市の宇津木遺跡からは方形周溝墓が６基発見されました。方形周溝墓はこの遺跡をきっかけとして名前が付けられました。私もこの遺跡の発掘に携わっていましたが、昭和 30 年代、調査が長引いて時間がなくてブルドーザーで土を剥いだところくぼみが発見され、大規模な遺構が見つかりました。それまでも各地で方形周溝墓は見つかっていたのですが、調査を担当されていた大場先生が名づけたことで、明らかになりました。副葬品としてガラス玉も出土しています。多摩川流域ではとても貴重です、西の方ではたくさん出てきます。中国から輸入したものです。弥生時代の遺跡は浅川支川の川口川流域に多く分布しています。多摩川本流の周辺は石ころが多く川も暴れるため水田はできませんでした。

■古墳時代　前方後円墳の浸透、石室の特徴

前方後円墳が大和から各地へ浸透していきました。日本全国でいくつくらい前方後円墳はあると思いますか？実は 5,000 基以上の古墳があります。最も数が多い都道府県はどこでしょう。それは千葉県です。600 基以上が見つかっており、九州全体で見つかっているものより数が多いのです。2 位以降は茨城、群馬、奈良、大阪と続きます。前方後円墳は大和政権のシンボルとして、従ったものたちがその形で古墳を作ることができました。前方後円墳は日本だけではなく朝鮮半島にも 13 基確認されました。残念なことに 1 基は壊されました。

奈良県の見瀬丸山古墳は 310m の大きな古墳です。同県の箸墓古墳は最古の前方後円墳で、全長 276m に及びます。大神神社の神体山の三輪山のすぐそばです。古墳では竪穴式石室に木製の棺がありそこに埋葬しました（例：下池山古墳（前方後方墳））。終わりの頃は横穴式石室となりました。同県の島の山古墳では棺の上にかぶせられた装飾品が見つかっています。

古墳は今現在では木が生えていますが、本来は葺石が施されています。奈良県のナガレ山古墳で墳丘が復元されています。10～20 年もすると木が生えてきます。

多摩地域では切り石積み石室（八王子市の北大谷古墳）、小ぶりな河原石乱石積みの横穴式石室（国立市の下谷保（しもやぼ）古墳群 1 号墳）、さらに簡単な作りの墓として、日野市の谷ノ上（やのうえ）横穴墓群は崖に横に穴を掘った古墳もあります。

青柳古墳群は畑だったところから 10 基も出てきました。直刀や玉類、耳環等も出土しています。

昭島市の浄土古墳は河原石積みですが、奥壁に 1 枚岩を使用しており、きれいに出てきました。

昭島市の大神古墳では直刀が出土し最下段がきれいに出てきました。奥の部分は家の排水施設があったため、崩れていました。棺を納める部分は 2 段にして区別していました。

多摩川の国立～昭島あたりでは、古墳群はあっても集落は見つかっていません。おそらくこのころの集落は多摩川の河川敷にあったのではと考えています。

日の出町の三吉野遺跡では住居跡が 70 棟確認されました。このほか八王子では中田遺跡や船田遺跡等の大きな遺跡が見つかっていますが、7 世紀の古墳は見つかっていません。

■奈良・平安時代　火葬墓の出現、庶民と文字の関わり

奈良・平安時代には、律令体制や地方組織（国、群、郷（里）制）が整備されました。政治の動きとしては、奈良時代には聖武天皇が仏教文化を取り入れた華やかな時代となりました。平安時代には前期には律令制を立て直し、中期に藤原氏の摂関政治が始まり、後期には武士が台頭してきました。奈良時代に葬制は古墳から墓へ移り、火葬墓が出現し始めます。また、武蔵国は貢馬（こうま）（勅旨牧）の国で、多摩川上中流域に牧が存在していました。

昭和 54 年 3 月に昭島市玉川町の青梅線中神駅約

50m 南西の道路下から火葬墓が出土しました。東国ではもっともすぐれているのではないかと言われています。私も発掘に携わりましたが、石びつの周りに木炭がびっしり詰まっていました。石びつの中に骨壺があり、獣脚付骨壺で須恵器でした。火葬は 700 年に三蔵法師に師事した道昭というお坊さんが火葬になったことから始まったとされています。持統天皇は初めて天皇で火葬されました。天武天皇と同じお墓に葬られていましたが、鎌倉時代に墓泥棒が入ってしまいました。その時の記録が非常に丁寧に記録されていたために持統天皇は骨壺に葬られていたことが分かりました。玉川町のお墓は 8 世紀の前半、有力者か僧のお墓であろうと考えられます。石びつが八角形であり、天皇陵はほとんど八角形であったため、高貴な人が葬られたと考えられます。

昭和 59 年 4 月に国立市の仮屋上遺跡から石製紡錘車が出土しており、そこには文字が書かれていました。「武蔵国多磨」「羊」といった字が刻まれています。庶民が文字を理解していたと大変話題になりました。

日野市の落川遺跡からも紡錘車が発見されました。「和銅七年十一月二日鳥取部直六手縄」と日付が刻まれていました。この頃の遺跡からは墨書土器が多く出土することから、当時の庶民は文字と関わりのある生活を送っていたことが分かります。

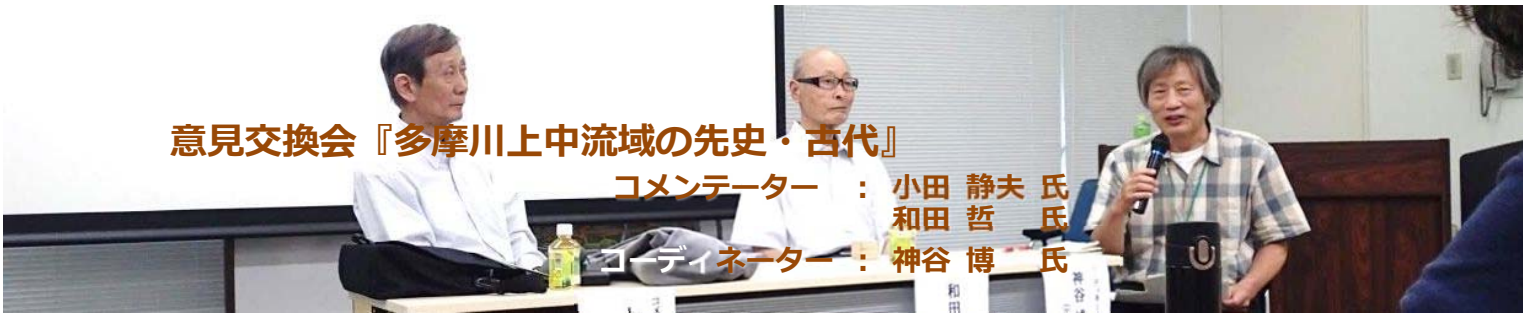
養老 5 年下総国葛飾郡大島郷戸籍（715 年）には構成・戸主をはじめ家族の氏名、年齢などが細かく記載され、竪穴住居に住んでいた庶民も管理され税金を納めていたことが分かります。

■多磨の牧はどこにあったのか？

あきる野市の三吉野遺跡から馬具（轡（くつわ））が発見されています。八王子市の多摩ニュータウン 178 遺跡からは馬具（轡）等が見つかっており小野牧関連の遺構ではないかと考えられています。

あきる野市周辺に小川牧、多摩市、日野市、八王子市周辺に小野牧があったと考えられます。

時間の関係で後半の説明が不十分でしたので、配布資料をご覧下さい。



【参加者】関東地域の稲作は、どこで、いつから始まりますか。

【和田】関東地方の弥生水田は未確認ですが、遺跡から米粒は多数発見されています。弥生中期から各地に集落ができ、神奈川県小田原の中里遺跡のほか、逗子市池子遺跡などでは木製農具なども発見されています。多摩川流域では大田区久ケ原遺跡などが知られ、東京湾を北上して荒川から支流の入間川を経て、青梅市方面に伝わったルートもあります。

【参加者】ゾウの化石の話を初めて聞いてとても面白く拝聴しました。日本の他の地域、朝鮮、中国などでもたくさん化石が見つかっているのでしょうか？その後絶えてしまったのはどうしてでしょうか？ナウマン象との関係もあれば教えてください。

【和田】化石は中国などでは恐竜をはじめ様々なものが発見されています。大型動物が絶滅した原因は、ナウマンゾウなどの温かい気候を好むものは、氷河期の寒冷化が影響したかもしれません。他方、旧石器時代には大型獣の狩猟も行われていたと考えられますのでその点も考慮する必要があります。

【参加者】集落の位置と海の位置はだいたいどの位離れているのが一般的なのでしょうか。

【和田】集落の位置と海は直接的には結び付かないと思います。海岸に近い台地の上などは集落には良い条件です。

【参加者】環状型集落の意味を教えてください。なぜ丸なのでしょうか。

【和田】環状集落中央に墓地を有する者が多いのが特徴で、これは祖先を敬い、生きている人と死者が一体で生活している場所です。環状集落には同心円と分節的構造の両面があります。資料の５ページ上右の西田遺跡の中央墓群を見ていただくと、中央に２列の直線的墓が並びます。これは、同じ集落の中に２つのグループが存在することを意味します。集落を大きく２分する例は南の島やアマゾン地域などにもあり、異なったグループが対立するのではなくお互いに協力して村を運営するシステムです（双分組織という）。

【小田】この地域の特徴を総合しますと、多摩川において、近畿地方から文化が来たとすると、千葉、東京湾が入口であり、多摩川をさかのぼって、立川、拝島の低い段丘にかなり広い文化があったということを説明で知ることが出来ました。一番古くても縄文早期の遺跡が最初にできたということが良く分かりました。

【神谷】ここまでの話になると想像しておらずびっくりしました。初めて聞くような、最先端の情報がたくさんありました。今日は時間が足りませんでしたが、中間シンポジウムを企画しているので、第 1 回、第 2 回、第 3 回の先生方と話足りない続きの部分を話せたらと思います。ご意見・ご質問カードを見てみると、半分以上はありがとうございますというコメントが多いです。和田先生から追加しておきたいことをお願いします。

【和田】こういう考古学のセミナーは固くなりがちですので、実は時間があれば見ていただきたいものとして石器を持ってきていました。

縄文時代に鮭をとっていた話をしましたが、縄文時代の後期からは網漁が盛んになりました。
私が自宅の敷地で採集した石器を持ってきました。普通に見るとただの石ですが、両側に刻みが入っています。これは網の重りに使ったものです。また、黒曜石も持ってきています。

【小田】旧石器時代や縄文時代の黒曜石の代表的産地としては北海道の白滝というところと十勝です。十勝の黒曜石は鉄分が入っているため、赤みがかっています。「十勝石」といいます。お持ちいただいたものはおそらく白滝のものですね。白滝の黒曜石はサハリン等でも持って行って使われています。そういう貴重なものです。神津島産のものもありますが、これほど質は良くありません。矢尻をきれいに作れるのは十勝の黒曜石です。

和田 哲 氏　プロフィール

早稲田大学卒業、立川女子高に勤務。昭島市文化財保護審議会会長、

立川市・国立市･羽村市･日の出町文化財審議委員

多摩考古学研究会事務局など､多くの埋蔵文化財の役職を兼務

縄文時代の遺跡を中心に業績がある

総合司会・閉会挨拶：神谷 博（多摩川流域懇談会運営委員長）

多摩川流域歴史セミナーは昨年から新しく始まりました。第 1 回は大田区立郷土博物館で今日もお見えになっている小田静夫先生にご講演いただきました。第 2 回は府中市郷土の森博物館にて江口桂さんに武蔵国府や古代集落についてご講演いただきました。多摩川流域歴史セミナーは全 9 回を予定しており、上・中・下流を古代、中世、近代に分けて開催する予定です。

この会は流域全体､市民と行政のパートナーシップでやっています｡先生のお話の中で新しい話、技術、考え方が変わっている話がありました。これまで多摩川リバーミュージアムとして様々な情報をまとめてきましたが、古くなってしまっている部分があります。専門家の先生だけでなく、市民のみなさんと歴史の見直しをやっていきたいと考えています。

本日のまとめ：小田 静夫

時間がもっとほしいくらい、すばらしいデータをありがとうございます。今日は考古学概説のような、大学の授業で教わっているような気がしました。考古学のイントロダクションを全て話していただいて分かりやすかったです。来てよかったと思いました。

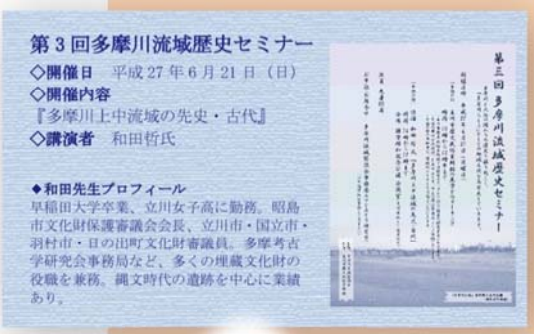
今日、和田先生に発表していただいたようなスライドは他では見られません。目の覚めたような気持ちでした。研究の集大成を見せていただいたと思います。ありがとうございました。

閉会挨拶：船橋 昇治（国土交通省京浜河川事務所長）

和田先生、貴重なお話と資料をありがとうございました。幅広くて奥深くて、まだまだ話を伺いたいと思いました。またお話を伺う機会を設けさせていただきたいと思います。

多摩川の昭島周辺は、地層の境目で非常に貴重な場だということが印象に残りました。多くの意味があるということを考え直すことができました。そういったことを考えながらいろいろなことに広げていけたらと思いました。貴重なお話をありがとうございました。

各回の多摩川流域セミナーで「歴史セミナーカード」を配布しています。



表面　各回の歴史セミナー概要を掲載

裏面　会場となる博物館情報を掲載

第３回多摩川流域歴史セミナー『多摩川上中流域の先史・古代』開催報告

作成　多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL：http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html